

成形圖說 農事部五

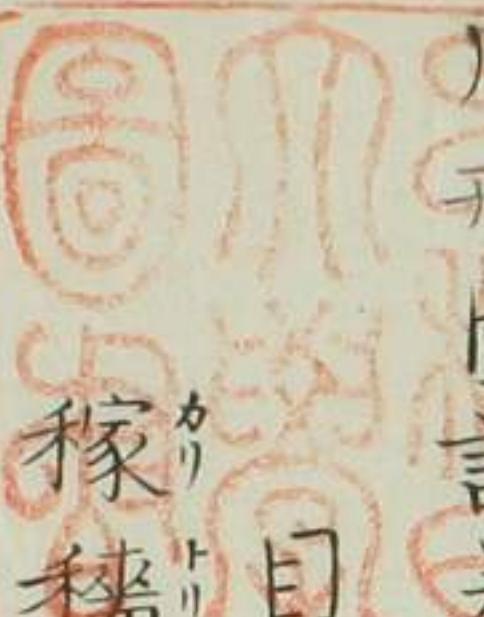
特別
2442
5

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

二一
2442
5

小野圖
氏藏書

成形圖說卷之五



目錄

登場

附麥莞

穀禾

附粬

糧糒

附粬

糙稗

附粬

米粒

附粬

成形圖說卷之五

昭和十八年
一月二十七日
購求

成形圖說卷之五

農事部 稼穡

刈

取 繢紀○倭姬世紀先穗拔穗令拔半分大稅令

刈

加留穗ハ細稅ムテ大刈セハ半トニ古事記ニハ鎌の字と

刈

教留と訓卫又竹弓ノ代カキメトアヤ國慶ムナリ田產と

刈

田 犯建武式目苑田狼藉事為撿断方沙汰可有紀明之所

刈

上 取上凡俗物と納めい

稼穡

書土爰稼穡○文選藉田賦躬稼以供粢盛所以致孝

莖節

為禾詩十月納禾稼所以固本也○說文禾之秀實為稼

含つり正韻種之曰稼

收穫 敗穫之又曰固本也○說文禾之秀實為稼

蕃名コールニニアステン

收穫書農

穫刈 講論

收穫

德

收穫

清耕

織圖

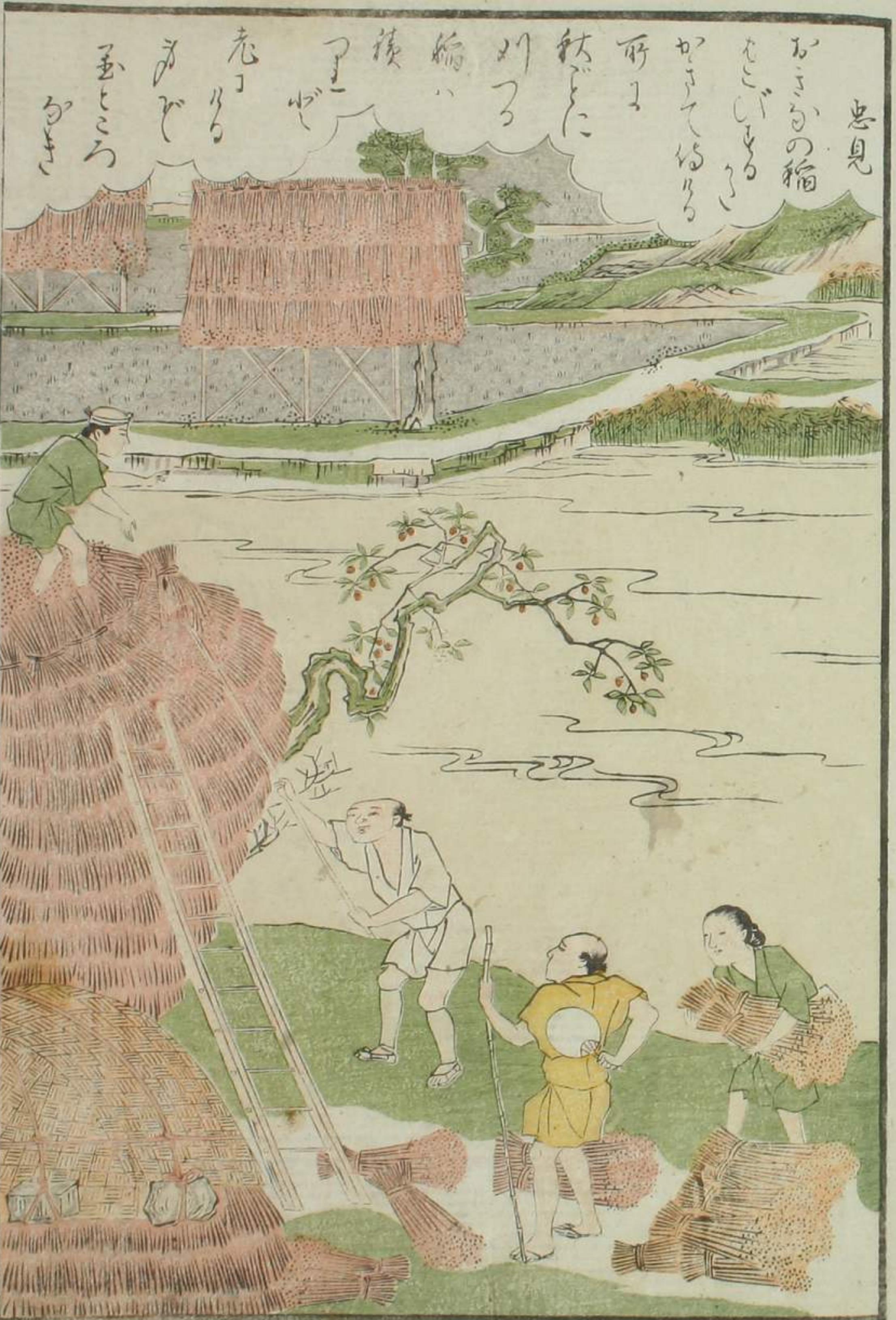
清耕

織圖

キユールハアレン 穫

稼ハ此より志通計と云農事と作と一切の儀法より俗より
つけ竹取あざ喰へア今幼子傭僕の教育をみし又禮制と
習焉とせんとせんとされどおれし禮制ハ儀式作
法のすや因禮儀^{アヤマシテ}儀^{アヤマシテ}失ヒ不作法ともア稼は農耕の儀法ゆ
ゑ論語みも學稼^{アヤマシテ}おとせ清あうば老農みちかども之
えり俗ニ生理^{アヤマシテ}とかせぎと称て稼字と用ひかせぎと云
言撰集抄もあればふき清あうばして活拾遺に持
の字とかせぎと前卫是^{アヤマシテ}も多^{アタシ}と助か^{アタシ}て云々と書ひよ
至義前やるや歌人歌合にかせぎが付^{アタシ}いつ所の名

也此義よりあり鹿苑と訓ハされバ稼穡ハ農功の儀
始とちやんありやの物もんハ終わんとてこそかせ
ぐあれ俗ニ荷^{オトキ}る稻ハ必ずとよづおとく耕^{カキ}
種^{カキ}を申^スむとて農の稼^{オトキ}とやじべきわざあらめやは夫
束穀^{アシタタク}との次第ハ許多の艱難工夫と取^{アシタタク}たうま
げぬあらの時節ハ七八月あくちば^{ヒアタリ}とて月中より
やううへは炎熱の氣蒸^{ハヌキ}がぞ^{タツ}堪^{カチ}らずに農夫ハ是
と忍びて早朝とけり引漬^{カキ}て中あらみと汗^{カキ}あとな
里病^{アガ}ハ熱^{アガ}めく时已よみと放^{カキ}し立^{カキ}のゆゑ刈^{カキ}よ被^{カキ}ひつ
因^{アタシ}づに攤^{アタシ}は金一又你^{アタシ}因^{アタシ}みどは田畠^{アタシ}或^{アタシ}ハ木と樹^{アタシ}



竹と柿て冬上よもぎの霜と寒月ともあり又奥もなま
ば一霜ニ霜ほど厚くこそ青霜す。又なく重つり堅
く熟をうひつゝと候て刈るをうり枕艸席は八月つ
がかりづて奉隆み詣げとて見きバ植みぬくは因は
人多くてねたゞ霜めるなりちゆうどこのかく、もにい
そ赤き霜のそせんにばかりおて刀を仰ふりて
きととキハサカのやうに外でへよ事ふ。とをまた
／＼々角のや被を上まで並居る。とおりふくゆま
八月ハ稻葉色づく。此にて月の名よも葉月といはづる
稻の刈上田の更あらり葉時より續貫行は霜の色づく

スハ被より赤く葉黄じと藁梅色とある秋八月より
九月より陰氣上よろて月潤之風身よ潔きはま雪地
下ハ十一月中より一陽起るより十月よハ地中暖ふ
る氣と信ち也此十月草木を梅蒼之木の葉謝る下より
陽氣上よつうくがごく霜を亦地下の陽氣よけい
根心ハ被ざるより刈れ半分は後よ霜根生く。然ども
地上の陰氣強く露終てハ霜とあり下より冷ちるよつ
きて被ぞり赤く葉紅色黄を夾むハまだ早くよまきう
ちと刈取事稻の刈節あり万葉よ秋の内乃被田刈れぞ
ウカヨイあくべ波とう人の音ヒホトカさん霜の穂

よちと穂田ホとよめぢうハ刈吉原よすりつうと云
又元亨判推章寄田畠百姓河款ニ田ヒ刈ヨリ行つうと
キうとうだくにうくの稻ハ多ヨアリ稻うらくい已
○或曰低田ハ稻株ヒ高く刈キバ土沙シラカバどまりて久垢
あまわ株ヒ亦上とさりて高く残アリ又或之の作の事
ハ行こうゲ試うち早刈稻ハ九月十四日より刈うち此収
一升三百目摺て五合七夕あり回一回ヒ廿日遅く十月
十三日刈つるハ一升二百九拾々摺て米五合ニタあり
是一升のゆみて廿日よく刈うちハ量目拾々摺て五合
足きる米のぬづく碎ざるゲかせらソツア且又麦田ハ

特ヨ早くア紀反一稻根ヒテし地ヒ乾カサカヒテ麦ヒ前入る
時ハ畠麦ヨ劣らざば成實城沼シロイチノヘ里西苑の地ハ
刈時キ微至ふと田のすハ常ニ遙く近カレヒキシマフ
るためあれバ少一ハ時節よりもよくおくれドツ宣
起りやくをきみ業あう徹書記音ヨ暖ヒタチヒ秋田ヒ吉
ハ村雪のゆくは時ヨリ月減アリ此音よく田家の
割カツヒキ穂いひ叶カツカツヒてあれある九月中旬ハモミ
ラ稻の刈時モ父母妻子田場オヤコタノモ下起りノ月の行
ヒヨリヨ夜田ヒ刈なれバ月ヒ見け月はヤマモニ
ト雲のゆくを晴くありと春のえがひかどよ仰

月とてそぞるまくは言ふ民の勤勞と就の體字一語より
せの憂うてぬぐああて後の歎の月まだ眼つゝじまで
月と仰きてからねやまくの歎えんどうじごとくある
ハ酒肴泡まで飲むとんと文雅風流ともんじがく
ゆるてじひす好じふよおちかまくもやうくいふ
ノ農隙のハ茂事と講じうりハあら事とせよふべ

稻積チワツキ出雲風土記神門郡稻積仙大神之稻積也○書紀人名
義ヨシにて祝詞

穂積ホツツキ古事記人名穂積あり東鑒德積莊預

古頭美新撰

○蓋米積 稻聚イナヒラ夫木集厚疊てうち稲已アヒはいふ
あらべし 登場詩幽風九月築場清耕織圖譜收禾圃曰場物生之時
則耕治以為圃而種菜茹物成之際則築堅之以為場
而納 穗ホツ也毛詩註露積曰穗積粟

露積ロツツキ同上註積露積也

○說文積積禾也

或作穀穀或作穀穀或作穀穀或作穀穀

並積禾也

積苦ホツク三才圖會○農桑直說云作苦用穀草黃

野草皆可凡露積須告繳益不為兩所敗

蕃名スコ一ヘニヲツブスクタ一ヘレニ

稻ハ刈上て去さぬ又磨搗ハ穀稈碎折之のあらぬ一
且隠て後束稻の穂穎と表ふ一圓く積累至て穀稈也
よく熟するとき持落にあらずなむ古事記傳云伯耆國束
稻と積累ぬされど久しく田間に在りハ雀鴨又鳴

き又ハ俄のあかどあまば遺穗^{ノヨリホ}となく漂流^{エフ}すと或野火
ニ罹^{カリ}て焼亡^ル一節^{カシキ}は震史の災^{マハ}に遇^スとあり 谷^ハ火^ニ燒^{カシム}
望^ムる所の硫黃^の臭氣^{カシキ}淡海志^ニ西近江^ニ繁田^{とよた}と云ふ
アリ 湖^の水溢^{ミツメル}る時^メ穂^の穂^{ヒサシ}を流^シじと整^スく放^トクや
稻機^{イナバシ}三代類聚格^の夫本集經信の寺^{ヨウジン}よりいり門^{ムケ}
稻木^{イナキ}和訓^{ハグニ}栞稻^{タケシ}と呼^フモノ也
麥笠^{イモリ}三才圖會^{ミツノカイ}笠架^{ハシマ}也 若^{ハシマ}麥若^{ハシマ}稻等稼^{ハシマ}
穫^{ハシマ}而東^{ハシマ}之悉倒^{ハシマ}其穗^{ハシマ}控^{ハシマ}於其^{ハシマ}土^{ハシマ} 喬杆^{ヨウカン}同上挂^{ハシマ}
蕃名

三代類聚格曰承和八年閏九月二日敕大和國宇陀郡人
田中構縣曝種穀之標似當火灾俗謂之稻機今諸國往々

所有在焉宜仰諸國廣此器專利之不得踈畧今接^{シテ}稻機
ハ今の稻本^もあゆ^ム一又出雲風土記神門郡杵山^ハ大神
御稻杵也^ハ御^ハ土佐の春水^ハ秋^ハ掛^{ハシマ}て在門田の稻
木未だ^ハ大木^ハ年有民の就^{ハシマ}て耕^ス○じ^{ハシマ}刈稻^{ハシマ}之^{ハシマ}
之^{ハシマ}の^ハ稟實^{ハシマ}刈者^{ハシマ}なりと^{ハシマ}すと^{ハシマ}り^{ハシマ}穀酒^{ハシマ}みめ^{ハシマ}お^{ハシマ}う^{ハシマ}
み^{ハシマ}く^{ハシマ}お^{ハシマ}う^{ハシマ}り^{ハシマ}も^{ハシマ}あ^{ハシマ}は^{ハシマ}成^{ハシマ}田^{ハシマ}み^{ハシマ}志^{ハシマ}毛詩朱註凡禾
者穀連稟結^{ハシマ}之總名也^{ハシマ}云刈穗^{ハシマ}ノ^{ハシマ}と^{ハシマ}き^{ハシマ}即^{ハシマ}禾^{ハシマ}ア^{ハシマ}の^{ハシマ}
ア^{ハシマ}又^{ハシマ}穀乃字^{ハシマ}和名鈔引四聲字苑穀刈把數也^{ハシマ}廣韻刈禾^{ハシマ}
又曰田野人所謂揀稻^{ハシマ}奥^{ハシマ}磐井郡東^{ハシマ}福山^{ハシマ}あり^{ハシマ}西行^{ハシマ}みち
一^{ハシマ}が^{ハシマ}か^{ハシマ}ノ^{ハシマ}奈^{ハシマ}ベ^{ハシマ}又曰稻手婆^{ハシマ}淡海志^{ハシマ}多^{ハシマ}也^{ハシマ}近江^{ハシマ}
ノ^{ハシマ}穎會揀^{ハシマ}与^{ハシマ}東同^{ハシマ}縛^{ハシマ}也^{ハシマ}

ゆるきの杜乃かけよもと詩小雅此有不斂穧と見る
え一穧字とは舊讀ていもたゞ俗ともうの捷字ともあれ
此等上世ハ租稅皆刈穧のまくふく上み納貢セリハ
小稻某束某把とのそ見よも續紀天平十七年制曰諸
國公解大國四十万束上國三十万束中國二十万束就中
大隅薩摩兩國各四万束云風土記殘編み公穀某丸假
稟某丸やつゝあと行り丸やつハ懷よて束稟の渭ちる凡
加茂御田植の狂言は今年種まきて秋の稻ハ何束
を収じてと云ハ右言あり當今ハ戎南島の民皆刈
穫あく税倉み納めをすり其數量ハ大稱也と輕重成
度至多サ、或知るなり又據三代實錄曰出羽國元慶二年

夷虜所燒盜穀穎三十二萬五百一束六把八分六毫精七
百五十斛とんえより其束把せけのみ分毫まぐり數と
るふと今の糙米の抄撮と相向之哉拾芥鈔より考引コ
十釐為毫十毫為分十分為把十把為束又曰六銖為一分
四分為一兩十二兩為一屯十六兩為一斤小一斤也三斤
為大一斤四十八兩也大十斤為稻一束一束一斗米春五
升是升耗是多く中古以あの稻乃束把の斤目の量哉
知るがし古事よりけ縛の秤の石の重くともあとしハ
民のうれへうれども今西清乃租稻といはれ多くおなじ
せども皆穀々々杠秤うちみて行目哉度アシルはどつ

その米行量と見て直とあらかと凡百斤四方の四斗又
ある一斛ハ即ニ百五十斤よりありといひ

毛美

古事記○即穀子也俗穀の字と用う元正紀より穀四百斛あり王篇

音尼

米乃衣

新撰

字鏡

穀禾

字典凡穀皆曰禾說文穀百穀之總名毛詩朱註禾者穀連橐結之總名稻林故梁之屬皆禾也

子

舜水

穀子

舍利

慈恩經疏舍利者稻穀也佛體大小如稻穀量故以爲名矣

蕃名ハアシイ

毛美

は田成物實

と有るあり一説毛美

也其實の萌發をもとつたり又毛美とは真實ひを寢寢
小泡スカビの夢枕スカビからゆるいのいもく應神紀より芳野
の國操蝦蟆ヒ上味とて名て毛瀧トソム毛美ハ旨と通
ヘアカアの方言ユ味ふまたソム毛美奈比と呼ぶ大同
類聚方小も天地間之衆味米第一云々○續紀養老三年
制曰穀之為物經年不腐自今以後稅及雜稻爲穀收之夫
皇國より毛美とひへま稻子とひて祝詞ヨ荒稻と
ええひ蓋五穀の属唯稻ヒ最上ヒテ他穀ハ俗ニ之
ヒ雜穀ヒ核ヒ五穀の外先此ヒのヒ表出也○天智
紀元年春正月稻種三千斛賜百濟八年三月賜耽羅國王

五穀種子ヲおとえテア夫吾邦の稻穀ハ五方の種ヲ
猶もあとシむしりハ異國ノを買來シ求メ一例多シ
因鎮西の稻穀と宋へ渡シとのど禁シられテあと何カ當タキ
時頭朝卿乃稻穀と粟實ヲ書シミレと宣副卿の御はの
ミとは何カと尋ナガシうとシて頭朝卿ミづめテ諱ナカニ
がくトおとシり是シをろうノのハふトよ粟ミいひ
ハモ衆穀の大名ハシマ後ハシマ粟ミのハシマて絃ミのハシマ
ゆゑなり本草時珍云古者以粟為黍稷粱秫之總稱而今
之粟ミ在古但稱梁ハシマ粟部ミ古事記傳曰ミモク皇御
國ミの萬ミ物ミ也ミ黑ミ國ミに優ミ中ミ稻ミ殊ミ

今ヨ迄まであの國ミモクて神代ミより御ミ所
由モロヒト往タマハシマ諸人カツハシマは免ミてシテ御國ミ生シてシテかシは
免シてシテ稻植ミと寫書ミ小稿ミあシ皇神ミ恩ミ頼ミと思シ
まシてシテ御國ミのハシマおシりシ行シはシい
うみシとシ○シとシ稻ミとシりシてシ田ミたシをシりシ場ミ
なシ向シむシは竹管ミみてシ揃シそシとシ中ミ右ミ稻ミ持シ
てシのハシマ引シそシ總ミとシ落シおシ
しげ被ミとシ薦シよシるシ勅シ穀ミとシ終シ日ミおシそシてシ上ミ
竹タケ押シてシおシく額ミ毛ミとシ折シ突シもシとシ是シとシ鳩ミ
らシ次シ小シ芒ミ毛ミとシあシたシとシ粗ミ麌ミとシゆ

里速一穀の塵芥をすり除く又再び延よ攤る曬て籠ふ
て穀殻と磨き破りつゝ或箕或米籠みてゆりきつままで
稈ハ上よ淳キ米ハ底よある其中未磨ざるものハ幾モ
じき磨き引破るあり今ハ千斛トホ遠てかゝるよて荒稈粗
本米と三段よ籠トホする由ゑ甚工夫と省くありさて残
志收なく磨き引けづる時通籠トホに入り其羽木と持せば
米ハあよ落ちく稈ハさむ横よ扇アラスカを花びく米と稈二段
よからずより是よむて刈あやしは稻穂始て米てのもの
みハ儀ハシマあり其一いくよ米と稈ハシマよどど刈あや軋河
草搗カヤあげ磨河カヤ破河カヤあごと其工夫次第始毛と

描オキぐく時よ及びく風雨の損壊獲收の耗失を記やう
に備小艱難タレナと苦くして百折千磨の業なき巴筆言ふは
彈ヨリく述ツクかく○あるがいもく農ノウの力わざ世よわざれ
あるハ何タガとゆるよ傍カタよりまづうの息をつきあ
へど潜カサら蜃カニのうき沈む葉よくべ視るよ陸カタの芳カタ
命と血波よかけて失ふやどのかくも吾用カタハよと何カタ
ト唯カタるぞと堪カタき蜃カニのやまとくと藻カタよどじあ
ひこをおもろつけまいづもう安瀬カタ道の水カタよどじあ
はあるとかくもあま葉カタおりいかへて大年カタと
限カタあり一そくせよ二度カタ仕付取上カタとよよかけて傷

くべーはくば示かは急しき中より我おり人來
 きてよき月つめ巴近く見えよて立ちまへは風
 情にて頗て福こぐをはあどてさうあふくあきつは
 此不ぞいとよなきにうとすいかく恨あどかの先
 カー人志まぬむけおとめ嘗みハおもい竹をゆれかく
 ろハ我あぐく甚といちねアラス丹づの色イロあふきり
 今度うめうやうあるがアラス石乃猪持あぐく海シマあくゆ
 も印のをもつてしろ軒イロキはからりてゆれどおりふど
 ちの日ハおほきよなりて秋山と秋山とおもてで方のつ
 くれ事ハシマひ無ムカシおりよががごかーあのね山あり





後柏原天皇

小車に

さき
よし

牛比
よし

めぐら
よし

竹馬
よし

同レ
サバ
よし



あとあるとて人よひゆうきてもさんへいミーとき業と
もゆゆとどちのゆつまうりくてハあらくのすとて世常
はりあれど辛苦つゝ媒^{タミナシ}より嫁^{ヨメ}入^スて薄^ヒい織^ツを勤^ル
嘗^{イテ}之農^{トドケ}トノ乃母^{モトカ}ばんとおをそよびか^スづて
女の男^{トドケ}しよハふとハ觀^ムよみとみとかーと男^{トドケ}
くんハ父母のはうらふよほ^スごー我^{トドケ}くくい食^ス
るやハいゝふもくや^スきよことまくらあんと十訓^{トク}
みよかし終^スりゆまハ亦農^{トドケ}者^{トドケ}の海^{ミツ}ありされど
おほ人の情^{シテ}あれハ如教^スよ高教^スとみて四事^{シテ}次^ス
ハ有^ス天地然後有^ス男女^{トドケ}義^ス吾^{トドケ}邦^{トドケ}天^{トドケ}の浮橋^スのむ^ス諸^{トドケ}

丹唱和の詞す起りて造端於夫婦の事と設ありけど其の
情と失もじ忠孝を奉く所よくし義も清ぶらうじ後後
は庶民がバ人ハナクろもなうまし物也あくわへ是
うりぞしは万葉集みハ慈氏教と相聞と或て妹貴也あ
くひ乃とみとばえ弟朋友のケヤビトからとまとど
入れられバ五倫ゆやうりてこゝろぬべきことすや
あくねども男女せむ皆済風み奔走猥褻み漏どりてゆ
道きくざるハ大ニ戒めびし万葉集りいもはすくゆき
やはくづき丈夫をもとめてよとのは後の悔あり此一箇
よりよくはじづきすけり

與禰古事記○土佐日記ふど興徳とぢかり阿波アキ也
古免上同和稻ハシ延祿ヨシノ乃与禰ヨシノとひちヒチそはソハされ
八木東鑑又俗ニ八十八の壽と賛トサムて聚ヨリて以ヨリふとあり
八木八ハチの教ハチ人殊スルふ不ムひヒて四束ヨリの折字ハハ
十八ハチ年ニ八十ハタハ 警牙カミガサ朗詠ロウモン
ヒ未ヒミの年ニとシアフテアフテトトアフテアフテ
米イシ和名抄引セイ七龍セブ米イシ穀實コモリ也タシ說文セイモン米象イシヨウ禾實之形コモリノヒメ註ツク顆粒カモリ也
十其稈彙ヒツイ開ハタハタ而米見ミミ也タシ八八米之形イシノヒメ今米イシトハ木
と書シテり於ヒテ此ヒテ出ヒテ有ヒテ又ヒテ白粲シロヒツ前漢書セイモン擗米ヒツ使ヒツ正ヒツ
日本風土記ヒツク倭國十二支之己ヒツク曰ヒツク米イシ白粲シロヒツ杜詩ヒツ精鑿儲ヒツ
白粲シロヒツ是白米之名ヒツ日本風土記ヒツク洪駒父云雲子新炊滑溜ヒツク玉粒ヒツ杜詩ヒツ玉粒足成ヒツ
雲子匙ヒツ又饭ヒツと雲子ヒツとシ又シ紅鮮ヒンセン任霞ヒンザ妝ヒツ 紅鮮ヒンセン見ヒツ
番名ヒツレヒツイヒツスヒツト

凡五穀の實ハ皆米なりいふ一ハ稻米ヒ典稱也。舊說ニ興ハシテトシニ御り御稱ハ種^{タチ}の思みてすまか姫なふとどアモ或謂米ヒ興称トシムは稻^{イナ}ヒの較^{シカ}也。根ヒ補ヒ苗ヒ奈返ヒムを用ヒ。免^シは益奇實ナラバ。一人ヒ右ハニヒニ通ヘリ。俗通^シて右免ヒ被^シヒ。又皆稻米に係^シ。稻米を粒大^シく齧^シて碎缺^{シカ}ヒ。轉^シて白く當^シ。或^シて味旨く適^シ。信^シヒ。第一^シ之東鑑^シの麌^{シカ}唐^{シカ}米^{シカ}ハ光綬^{シカ}也。ヨリ^{シカ}凡上田^{シカ}の米^{シカ}ハ少く圓く色蒼^{シカ}黒^{シカ}く足え^{シカ}。齧^シ糠^{シカ}アリ。下田^{シカ}の米^{シカ}ハ粒大^シ。ヨリ^{シカ}糲^{シカ}の^{シカ}ノ^{シカ}白^{シカ}一齧^{シカ}耗^{シカ}。又上田^{シカ}の米^{シカ}一文

田の重さあつて半粒百八十顆^{シカ}。细微^{シカ}少^シ。下田^{シカ}の米ハ一文自^{シカ}五百粒^{シカ}の多^シ。

飯穗^{ミツバ}古事記○書紀人
米粒^{コメノナメ}古事記○飯粒^{ミツバ}あり

凡室^{ツツ}には室^{ツツ}も多^シ。多^シの者^{シカ}なる。俗語^{シカ}云^フ。室^{ツツ}を運^シ重^シて走^シらる。凡^{シカ}粒^{シカ}ハ圓^{シカ}く大^シ。又^{シカ}上^{シカ}とて。その中^{シカ}經^{シカ}尖^{シカ}扁^{シカ}稜^{シカ}字^{シカ}。

蕃名コルレイスト

一ちりばをと答白紅殷黃淡墨ちどり種一ちりば四
季物語よ五月ナ四日ね尾の神今日乃宣ひ了 大内
よまとで神祇仰そよのにてれすればや、りゑやゝの夢
の根と根あしてチ根こせよば粘吸乃申よ入てえも
粘吸ハ七種の臺乃あまに又う自他清潔と紙一
アキマセドとくの今果行あぐの法國の糸と飯ひうぐ
るきのハ米粒と並相てアラクヨリハ何國米是ハ何
ケ事ぞと堂端もよ十ヨ一と御どすゆめゆもると
キムベー又糧運夫ハ俵の經度とさあとも入室ヒ料
シ合撮ヒ差ざる皆このれあり○和訓聚曰式の志摩国

ふハ田何いど粒のむぢく記さり本朝世紀正暦五年十
一月豊前國兩米初如小豆日闌之後頗以減少似破米一
村下人或以取食所拾採二三合許なるもの阿モ

加天古事記○書紀ニ稟と訓ウリ而飼代の畧ナニ仁德紀
ミ今將酒代當代あどいアリ後又代セ濁音
ミ呼ハ村あり冲縄みてハ食とといつモ
袁志毛乃同上神武紀ニハ袁毛乃とあり左ハ 扶持米
糧周禮廩人凡邦有會同師役之事則治其糧
典食註行道曰糧謂糒也止居曰食謂米也
蕃名ゲコーグテレイスト

古事履仲巻以阿知直始任藏官亦給糧地糧地ハ今の役

糧の高地より扶持米ハ兵賦よりアリ凡其賦ハ百石、七人扶持三百石、十二人扶持五百石、十六人扶持千百石、廿五人扶持二千石、三十四人扶持一萬石、百五十人扶持五萬石、七百五十人扶持十万石、千五百人扶持より

加禮伊比新撰字鏡○姓氏

錄乾飯子仰より

保志伊比

和名鈔○河内志沒川郡道明尼寺町

糒

音避字
製之糗世謂道明寺天下之絕品也

糗糧

尚書○本艸云蒸米麦熬

蕃名ゲドローケテレイスト

延喜春宮式糒糒一斗一升二合五撮のみーの儲蓄ハ

多かリムシテ乾飯一斗一升ナリ今ヨリ東國ヨハ此貯
アリ仙臺糒諸所ノ名高一作糗法冬月申糒米ト一夜水
ミ浸翌日煮て塊ト解き席ミ高く撥布陰乾少し亦塊ト
碎カ直ニ油墨土器に入武火ミテ焦ニ炒バ腰ト末トシ
砂糖ヒ加ヘ直ニ乾め用了時湯に和シ拌或食シし食ふ
糒和名 烧米 鈔
熬米 亦鳥口
糒和名 烧米 鈔
扁米 凡晚夏中ニ早稻ヒ收マ
ふ
糒音邊和名鈔引唐韻燒稻為米也
糒○切韻新稻燒而春之得米也
蕃名ゲブラアデレイスト
東鑑曰節料燒米可為國司德分今種カの时乃燒米ヒ

鳥口と鶴は宇治拾遺の大饗オホアマツもしくそりともと鳥食オホアマツとおれオホアマツ。○和州平羣郡志貴山より來燒石とて名石オホアマツとあやうり皇極紀童謡イノヘの石上に小猿コザルコノヤク朱燒サルコノヤクと云マキア石オホアマツとて米燒コシヒカリと云マキ古史考コシヒカリ云マキ神農時民食穀コシヒカリ釋米コシヒカリ加マツタケ燒マツタケ后アフタ上アベ而食マツタケ之マツタケ奥州二本松マツタケよ長者ガ倉カワラとよあも土申マツタケより燒米コシヒカリを出マツタケは燒マツタケよ三代實錄マツタケ夷虜出洞國の穀糒コシヒカリと燒マツタケ盃マツタケ。一あとええたりとみ二本松土中よりもあふ燒米コシヒカリ外此等の遺種マツタケあくよも酉陽雜俎マツタケ乾陀國昔尸毗王倉庫為火マツタケ所燒其中粳米コシヒカリ燒者于今尚存服マツタケ一粒永不患瘧マツタケ又清の周減齋因樹屋書影病心者拾マツタケ歎マツタケ之即愈マツタケ。おの佗陸祚蕃カ粵西偶記カ云葛仙米王槭秋燈

叢話云黑米皆此物なり本朝食鑑曰伊勢莊野市上造燒米コシヒカリ以青麥コシヒカリ作俵子裏マツタケ之マツタケ。比米オホアマツ或說非米オホアマツ非粥オホアマツ之義とハ恐ハ贅筆マツタケが姫飯藻芥マツタケ類篇マツタケ煮マツタケ爲マツタケ糠マツタケ○食經作マツタケ糠マツタケ法取蒸米一升置沸湯マツタケ勿令過熟マツタケ出著新籠マツタケ内是此間の汲漏饭マツタケふらん海人藻芥マツタケ曰公家御膳マツタケ飯者強飯也執柄家等如此姫飯全分畧儀也但人々依好惡用之強飯時飯湯也而近代姫飯時を湯まぬらせふと召不叶理者也この姫飯ハ今常の飯みて強飯ハ蒸飯の事マツタケ万葉集貧窮問答の歌に瓶マツタケてと詠マツタケを考へむしは上又資兼王日記曰明應十年ト共に蒸飯マツタケと知らる正月一日諸社遙拜之後三献有之次御コハ次比目始この比米始ハ今の僭に告期の意と遺マツタケりマツタケ食マツタケハ人命の天マツタケかれバ歲首マツタケ

平精米 和名鈔○東雅よりとは於平をもつて穀おと
白くとふ 粗平 半白 今醋あど醸もとゆ一升
糲音厲史 記序糲稻之食註一斛粟春七
糲米謂春一斛之糲也

烏米 和名鈔引
食經一名

蕃名

太平十二策云 伊勢太神宮ハ三杵の供御聞食とは粗
平の末代事あり韓非子云堯之王天下也糲粢之食と
も人えぬ古語云入主自奉儉薄天下化之上踐節儉則不
令而行民俗自歸於淳樸上下分定億兆志定斯治天下之
要道也されば後この帝皇を倚廬御在處にてハ女房

夷波とつあて御配膳よしと白御飯の上よ馬き御
飯とくもへくるあり玉色よ深るハ後乃代のりやまつ
あらべ一馬きハちくわぬよねうづさむ 漢聖斗公
簾の亮眞和紗よ

精米新撰

與禰志良具

同上

白米

貞觀儀式

稗音稗或作稊精粗糲の三字并白米也詩大雅註米之率
糲十稗九穧八侍御七凡栗五升為糲米三升以下則米
漸細故數益少四種之米皆以三約之
是三升さかが足よ肅皇帝あた新なり

白米

唐

六

蕃名ゲスヌムブデレイスト

是通例の春米たり駿河國民部省帳より阿兵郡阿兵布無
公穀假栗市間出一軒五升之精米各月兼充國府之處爲
厨司之料和泉式部集より卷一の志^{アシ}ノ内^{タメ}がよぬとい
ふとめどもあ付るとつよとて織のゆるむ原いり
スハモグムシキ^{アハ}はうとして墨^クどより西土の米
ハ此間の^{アホ}幻杵^{アハ}にて春^{シテ}ハ多^シく碑^ハ破^ルゆ西^{モロコシ}ヨリ車
みて搗^{カツ}く^シ其^{モロコシ}脆弱^{モロキ}と^シるべー

真精米^{カミシラヒ}和名鈔○鳥^{トリ}逐福^{オトモト}ニ福^{トシ}の神^ミといひ
少^シの缺折^{ハガク}金^{カネ}糸^{イシ}粒^{リツ}とえ^スぐな^シ 簡米^{カミコロコ}
佐^サニ御膳^{ミツ}米^{コメ}と^シる^シハ即^{ハシマリ}漢^{カン}の御^{ミツ}ニ^{シテ}有^スミ^シ 上白米^{カミコロコ}
太白米^{タコロコ}

穧^{音竹本字穧}左傳作鑿或作穀^{説文米一斛春為九斗}
韻會小補栗一斛為穧米九斗春穧一斗為稗九升又去
穧^{為穧則八升米之}
細者乃窮于御

番名ウイットエンソイフル・レイスト

米^{コメ}と^シる^シハ神代紀^{ミタケノキ}ニ荒暴^{アハラシ}の世^ト治安^{セイ}ニ属^ス
み^シ平^{ハシマリ}じと^シる^シハ精兵^{シラヒ}ハ^シら^シる^シの^トあり又
ミ^シ精^{シラヒ}と^シる^シハ^シと^シ米^{コメ}と^シ向^シく^シあ^シる^シ穀^{コモリ}
米^{コメ}と^シる^シ復^シ看^シて精白^{シラヒ}と^シる^シお^ト切^シ膳^{ジン}琢^シ磨^シと^シう^シが^シ
ミ^シ一^チも^シも^シ皆^シ取^{ハシマリ}り^シむ^シを^シや^シと^シ夕^{ハシマリ}よ^シく^シ極^シ一^ハ
それと覺^シえ^シぬ^シあ^シの^シ事^ト精^{シラヒ}と^シう^シと^シハ^シか^シく^シ行^{ハシマリ}

々の宋書曰晋平王以短錢一百賦良民登就求白米一斛
 米粒皆令徹白若有破折者悉刪簡不受○仁德紀十三年
 定春米部天武紀ニ春米連くとひに日本後紀云諸國
 所春年料白米舉百束戸春利十束野府記曰白米千百斛
 免己為流例而主稅寮勘發以租穀混合正稅可春進者頗
 似無其理○事文類聚田樂府序云臘日春米為一歲計多
 倉中經年不壞名冬春米○耗又古美米といつて俗
 言倍利也凡物の費るどんじと云ふ省入と云ふと
 肖ひじと云ふがごと類聚國史ニ今或所司斛斗之外
 更加耗分精則一俵二升已上穀亦斛別五升已上と云
 今何令耗の言何り又欠打口すとハ穀物等の耗分と給

神功皇后の御夢モ此鼓白酒
 と醸あん人ハモ此鼓白酒
 よりてくまひつゝ鼓白酒
 きりてくまひつゝ鼓白酒
 きりてくまひつゝ鼓白酒
 きりてくまひつゝ鼓白酒
 きりてくまひつゝ鼓白酒
 きりてくまひつゝ鼓白酒
 きりてくまひつゝ鼓白酒
 きりてくまひつゝ鼓白酒
 大嘗の時技穗觀式ニ
 ありて次春御稻御福酒と
 童女下手次諸女共春
 と弓弓造酒の童
 やみ酒醸と
 ちせしよとく南島
 ヨ俗ありと
 近江國愛智那福壽寺
 うやみのあ
 と君とく初植う
 那



入事ちよ○五代漢隱紀云舊制田稅每斛更輪二升謂之

雀鼠耗王章始令謂之省耗

雀鼠耗の事ハ南史

白鑿新換字鏡又式名目類聚鈔曰染ハ糯米と熟し僅ニ卷て雞卵の殻長如く作る案蟬是ニ傳る

糴音昏亦作糴山海經註祀神之米糧音皇集韻祭米

蕃名ランゲアレンディスト

登伎ハ磨なり米レ精ぐゆの粧ナリトス一說ニ齊也
齋ナリハ潔齒して神と並ぶより出づるあと^ノいへ
アモリバヒトキトハ布神ニ享^{スル}石つり^{シテ}ナム後
み染の字志登^{シテ}也と讀ムトハ和名鈔引切韻染祭餅也と
あらざば據^スセリみて俗ニ白米レ洗淨て神ニ享^スト洗

宋^{シテ}とどメ又粳米みて染化^{シテ}て煮^スガ^{シテ}志登幾^{トス}
煮^スカ^{シテ}ハ即^ハ手^{アラビヨナ}握^ス子^{トス}ア^{シテ}洗^ス東^ハ黒米^{ミテ}用^フ染^ハみ^{シテ}白米^{ナリ}バ
志^{シテ}登^ス幾^{トス}ト^{シテ}ハ^{シテ}神樂歌^{ヨシ}波^ヤや^シの唐^カ岐^ヤ
御稻^{シナワクヨナ}眷^女の美^シ其^セ彼^ルレ^{シテ}せ^シま^シと^シあ^セ
ム^シと^シ益^シナ^シ米^ビ青^シの相^シ歌^{アラシ}あ^シべ^シ又^シ穂^シノ和^シ
鈔引離騷精^{シテ}精米所以享^シ神^シ也和名八萬之稱^ト有^リハ新
猿樂記の鈔^{シテ}米^{シテ}書紀^{シテ}神稻久萬之稱^ト訓受^{ナリ}和
訓葉^{シテ}曰^シ然^ハ莫^{ナリ}一役^ニ天^シ然^人ム^シ是^シモ是^シモ^シ束^タ
稻^{シテ}ト^{シテ}廣前^{シテ}舞^シの式^{シテ}舞^シ行^スト^{シテ}ナム

殘稻鈔

漢語

穀 音活 說文作穀和名鈔
引 唐韻 春穀 不瀆者也

蕃名

穀ハ穀ヒクズ 稹トモガアリ 稹ヒ太圓小豆ナリ
粗本字鏡 新撰
米裂和名
小米筒落米
米乃粉
糲音屑作穀訛也 和名鈔引唐韻米
糲麥破也 春餘也 糜音蔑集韻糲也
糲碎曰糲

蕃名ゲゴロイスデ・レイスト

豆穀ヒ磨テ遠節フムシタリ いはゞヒミの脱ガれ
カノド小米ハ春米の屑ナリ 小米ハ飴ヒ造の料ニアセ
ア○飴ヒ製法ハ小米一斗個アリシベシ 小米アリレバ
糠白米ミ角ナラバ

餡 餡延ニテハ小米六斗と本ヒ麦芽一升但磨ベシ以上二
し 髮湯の加減ヒ之ニ穢ヒセ 麦芽一升但磨ベシ以上二
品ヒ和前ヒ温湯二斗五升ヒ入テ罨ナラスヒ一時ホド
シテ後筈ヒ中ヒ抑ヒ拘ヒ汁ヒ汲取ヒ是ヒ飴ヒス
亦云水飴 チリアヌ 亦凝煎ヒも瑞珀の色ナリセ也是ヒ兩人相對て
膠飴ヒス 地黄煎ヒス 双方ヒ引延ヒテ色白く中ヒ窠ヒ度ヒヒ乃飴成
也凡霧熱ヒ會ヒ餡津了因米糠ヒサヒテ移ヒシテ塘マリ

志比奈世 和名鈔○今俗志比
稱志比奈ヒ

志良與禰新撰

美與佐訓蒙

志良

粂 說文不^レ成^レ粟^フ也
書若粟之有^レ粂

蕃名ランベフリユクノテ・レイスト

志比奈世ハ粂稻ナリトソウガト^{シテ}其稻實のなきと
ソムナリ和名鈔野王按曰穀實但有皮而無米也○賈誼
書云昔者鄒穆公有令食鳬雁必以粂吏請以粟公曰夫百
姓胸牛而耕曝背而耘勤而不敢惰者豈為鳥獸哉粟食人
也何^ヲ斯其養鳥也支奇禽異獸の人食ともみあぐ民よ
餓莩の危あるハ王公の耻トソウ所あり

加良書

紀

奴加上同

古奴加米糠の畧或

磨稃

荒稃

穀殼

八金

あり

糠亦作穠

和名鈔引爾雅註米皮也○稽音

糲此^ヲ粗糠^ト訓^トス

アラタリ

稃穀皮也亦

米糠

細糠

以上鄉談正音

蕃名セームル

加良とは穀を通じて米の穀^ヲ義あり奴加ハ脱也其
実の脱^ヲと捨^ヤリ○糠の用最少^ク少^ビ牛馬^ヒを食ふ
少^ク熱^ク少^クビ又先歎の年ハ人糧^ヲ少^ク或^ハ鹽^ヲ和^メて
未^シ骨^ヲ又田圃^の培養^ヲ次^シ烟草^ヲ熟^ク用^ク又創傷^ヲ
少^ク糠^ヲ脂^ヲ煩^レ雁^來瘡^ムハ蒜^{ヒル}小麥^ヲの霜^ヲ潤^セ匀^シて塗^セ

脂ハ鍋々々遍炒まば後墨く焦^シ或曰東北ハ地凍ゆ
く燃るなりモトふ脂瀝^リ而渟^ルる
る故關東の農人多く上方の糠と實飯肥糞又易^シに齧書
云顧歡所居郷中有學舍歡貧無以受業夕則然松節讀書
或然糠自照晉書云王戎子萬有美名而太肥戎令食糠而
肥愈甚按^シ猶澤了介傳云正保中了介備の岡山侯^ノ官
少年三十歳左右時^ニ騎馬隊^ノより嘗患體肥漸至於妨起
卧乃謂甲胄之人不能上馬可乎由是一斬肉食麥飯鹽豉
喫素洒然寢則單被絆身耳每至夜半輒起濯足跣踏中庭
舞刀槍習擊刺久之竟致疲羸乃止み内^ノくるのちあるのみ
よじりハ肥滿して薙^シ草もす^シハ商人^ノ似^フアリといや

一めうりとくや王萬り肥アリと患て糠と吃てまづく
肥^シハ^シ絳政ヤハ徒^シ口腹^シカ^シりて^シ足^シの勤^シ
カ^シぎ^シや織田信長譜云信長為用力於軍旅時々與
奴婢相交以巨杵春米^シと^シ古人の用意ハ大しよかく
の^シと

荒米 故米前年^ノの末^シ 大日經米 毛入米 宇登米

虫附米

惡米

老米 陳倉米 陳廩米以上本綱

糆音紅亦同 秧字典 陳臭米一日赤米

粢

蕃名

李時珍云米年久者性涼下氣除煩渴調胃止渴治霍亂大渴史記漢興七十餘年太倉之粟陳々相因充溢露積於外至腐敗不可食凡久一米糧貯貯之欲食者ハ猶稈あぐとしけばいく年経てとれもうがぼくらあくて來るて取食じよは黄柏汁より浸して乾しけば數百年と經てとれぬとあり

成形圖說卷之五終

